みずつき 9

「水」がテーマのアンソロジー
2020年 初夏

2020年初夏 「水」がテーマのアンソロジー みずつき 9
発行：2020.06.15 ｜ 短歌：ご寄稿くださった皆様 ｜ 企画・編集・装丁：千原こはぎ

mizutsuki 9
http://kohagiuta.com/design/mizu9/

mizutsuki 9
http://kohagiuta.com/design/mizu9/

まっすぐ海を

震えてて、受話器を置いたとき外は大雨だから頬も濡れてて
ここじゃもう乾いた喉を潤せずただひた走る鍵も落とした
石くれや雨や私や数多など素知らぬ顔で川は流れる
枯れるまで汲み出せ枯れるその刹那までは汲み出せかろうじて人
水底へだろうと君は踏み入ってやけに静かな福音でしたね
数多から波は静かに隠しゆくまっすぐ海を向いた足跡

夜夜中さりとて @yorusari

さよなら、またね、なんて言わない

バスタブに誘われていることですらデートだなんて思ってた、夏
炭酸の抜けたサイダー好きだったあいつのものをただ捨てている
ぐしゃぐしゃのサンダルちょっとかなしくて青になっても進めやしない
コンビニがきらきらひかる雨の日の夜はたくさん宝石がある
ビニールが濡れないように抱きしめて抱きしめたのに行き先がない
スキップで蹴散らしていくみずたまりさよなら、またね、なんて言わない

りりー @s_river_lily1

天が泣く

龍神が言祝ぐように雨が降り清めた空で世が改まる
友に会い別れる時の大雪を遣らずの雪ときみは言わない
在りし日の笑わすためのおしろいと似た雪が降る春の夕暮れ
曇り空「いや雨だよ」の声がするそれなら今日は雨は止まない
雨音ときみの努力を共に聞く明日は晴れるきっと晴れるよ
雨が降る疫病流行る街々に清めておくれ清めておくれ

ルオ @ruo129

ご参加いただいた皆さま
（五十音順 敬称略）

青時 あおとき
青藤木葉 あおふじこのは
秋山生糸 あきやまいと
甘酢 あまず
天野うずめ あめのうずめ
雨虎俊寛 あめふらしとしひろ
新棚のい あらたなのい
有村桔梗 ありむらききょう
五十子尚夏 いかごなおか
石川順一 いしかわじゅんいち
磯山武士 いそやまたけし
伊豆みつ いづみつ
犬塚晶加里 いぬづかあかり
宇祖田都子 うそだみやこ
内山佑樹 うちやまゆうき
泳二 えいじ
枝豆みどり えだまめみどり
大橋春人 おおはしはると
大森千里 おおもりちさと
岡田奈紀佐 おかだなぎさ
貝澤駿一 かいざわしゅんいち
@kaizen_nagoya かいぜん
かざえ かじはうかずと
梶原一人

梶原翔星 かじわらしょうせい
門脇篤史 かどわきあつし
がね
秋れ井戸 かれいど
京野パンダ きょうのぱんだ
幻想青瀬 げんそうあおせ
漕戸もり こぎともり
小泉夜雨 こずみやう
御殿山みなみ ごてんやまみなみ
紺村 こんむう
西藤智 さいとうさと
さかがめ
三梢モニオ さんこずえもにお
嶋田さくらこ しまださくらこ
西鎮 しゃーちん
芍薬 しゃくやく
雀來豆 じゃっくまめ
鈴木智子 すずきともこ
諏訪灯 すわあかり
千仗千紘 せんじょうちひろ
ソウシ
たえなかすず
多香子 たかこ
瀧口美和 たきぐちみわ

田村穂隆 たむらほだか
たろりずむ
千原こはぎ ちはらこはぎ
ｃｈａｒｉ
月丘ナイル つきおかないる
つぶら満月 つぶらまんげつ
橙田千尋 とうだちひろ
ドーナツ
とみいえひろこ
中村成志 なかむらせいじ
ナタカ
楢原もか ならはらもか
成美 なるみ
にう
西淳子 にしじゅんこ
西村春希 にしむらはるき
沼尻つた子 ぬまじりつたこ
薄荷。 はっか
春名柊夜 はるなしゅうや
福山桃歌 ふくやまももか
藤村内向 ふじむらないこう
藤森岬 ふじもりみさき
ふらみらり
ぶるーうぇっとふみの ブルーウェットふみ乃

真岡まな まおかまな
街田青々 まちだあおあお
真水翅 まみずはね
深影コトハ みかげことは
満島せしん みつしませしん
衣未 みみ
宮嶋いつく みやじまいつく
みやや
虫武一俊 むしたけかずとし
最寄ゑ≠ もよりえき
森川　晴 もりかわ はると
八重柏誉一 やえがしよいち
山上秋恵 やまがみあきえ
山川築 やまかわきずく
夜夜中さりとて よるよなかさりとて
りりー
ルオ

みずつき 9

89名による534首の「水」がテーマのアンソロジー

青として、恋のような

最初から一人ぼっちの恋だから大海原で赤い糸噛む
三日月の舟ごと沈む切なさはシーツの波に寄せては返す
うつつとは思えぬ夜の逢瀬から庭の白露止めどなく編む
思い出すのはその広い春のような背中ばかりで　雨柔らかに
あなたとの距離は百里を越えるから洗面台で月を映して
車窓から海が見えたら青として生きよ　終点三崎口駅

青時 @madobenoumibe

僕うの地球は水浸し

満ち欠けじゃなくて潮だねさっきまで触れられるほど近くにいたのに
きみの嘘 グラスの結露 プロセッコ。温度差という名の残酷か
一雨が作る区切りが恋しくて靴履きながら長傘掴む
溜め込んでいらっしゃいます?はい／いいえ。「選ぶ」権利があるのだろうか。
川。どこか潔くても深淵で引き止めていた気泡があった
生物の講師が言ってた「僕らの体は水浸し」信じて泣くよ

森川　晴 @haruto_papurika

絶対零度

満杯の電気ケトルの沸く音と茶碗の罅にふっと目をやる
無防備のつむじを狙う天井の滴り冷い旅の朝風呂
いつまでも温い真夏の蛇口から舐めたこともない赤い錆の味
塩っぱいポテト片手に噛み砕く苦い氷と解けないパズル
玄関の雪に熱湯振りかける南の人よああ白煙
誰にも水一滴にも慈悲のない永久に平らな絶対零度

八重柏誉一　@YaegashiYoichi

ほどいてプリズム

透き通る水面（みなも）のような影落とす君のまつげに魚は群れる
近くより遠くで見る海が好きそうだね君の愛はあたたか
海岸の浅瀬でじゃれるような日々水面（みなも）の光に君は溶けてく
雨の日の曇るガラスに指で書くあなたの名前そこだけ透明
この雨は置き忘れた傘たちが流した涙 君の街にも
雨のあと靴も履かずに走り出す虹のプリズムまだ逃げないで

青藤木葉　@konoha__ao

水際

ざぶん、波はゆるく流れはすみやかにごらん、奈落がこんなに近い
綺麗事ばかりつぶやく冬の海にもペンギンが浮いててほしい
見いだせば透明だった傷口の水にわずかに朱がさしている
あこがれは潰えて石にはりついたポリプいつかはまた海へゆく
西空に三日月ひかるそのうえにねむるたましいふたつ　さえざえ
夕暮れて光滅りゆく波ぎわのごーほーむ、のー、ごーほーむ、ごー

秋山生糸　@kiito25

みずうみ

ソーダ水の中で遊んだ夏休み　君は普通の友達だった
母からは初恋などと笑われていたがソーダは澄んだグリーン
君も私もみんなのうたが好きだった「みずうみ」というううたが流れた
〝恋と気づかず恋した夏〟ってなんだろね　小四にしては無邪気なふたり
ソーダ水のグラスが翌年割れるとは思わなかった幸せな夏
友達のままで別れてよかったな　それとも〝恋と気づかなかった〟？

山上秋恵　@akiemuroran

水滴

打ち切りの漫画を買ひて店を出づ雲の下にも雲動きをり
信用と信頼の差よ　おそなつの変電所へと降る天気雨
秋雨をくぐる列車の窓にあり無数の傷のごとき水滴
浴槽へ湯を入れ直す手の甲に白髪ひとすぢへばりつきたり
くさめして顔を上ぐれば水分のすこし少なき世界と思ふ
製氷の音かそかに聞こゆ夜半覚めてふたたび眠るまでのあひだに

山川築　@Wonderful_Maze

水の都に雨が降る　その弐

堀川の落ち合う崎の茶房にてやまない雨を眺めています
雨だれは鼓の拍子小気味良く袖振り踊る河岸の菖蒲
四十間堀川沿いにガタピシによく似た犬が尻尾を振って
水飴を買う母親は大雄寺驟雨の洗う墓石の下
あじさいが青から赤に変わる夜大亀の歯にあたらしい紅
雨雲が流れて松江大橋の擬宝珠の上に光る露玉

宮嶋いつく　@miyazima_izq

パノラマ

描かれた遠い港に日は暮れてそれは誰かのふるさとの色
永遠に予感のままの雨を待つ静かな丘のある展示室
ジムノペディ繰り返される温室に絵のように広がって睡蓮
フランスの河はこの町の梅雨となり多湿な部屋を彩るラヴェル
いくつもの画面からオフィーリアは消え講義室を吹き抜ける夏風
カレンダーは家を出た日のまま揺れるシスレーの淡い水を湛えて

みやや　@miyaya_tanka

水色

水色の下着を選ぶ風呂上がり品質表示が肌に優しい
テキストの表紙は薄い水色で床に流れてゆく明朝体
ネクタイが水色だったことだけを除いて何も覚えていない
水色の付箋を貼ったまま君が私に返す１Ｑ８４
バーゲンで結局買った水色のスカートを履く前のさよなら
サンダルを履いて扉を開いたら踵に触れる夏は水色

甘酢　@azukicreamcup

歩くスピードが僕だけ違う

出しきれず残ってしまった語尾がある溺れるときはいつも同じだ
カルピスが欲しいとかって言えなくていつも笑って頷いている
僕だって夢を叶えたかったんだ余った醤油をそのまま捨てる
液体の流れに逆らい歩いてく明るいだけのイオンモールは
水溜り映る全てを愛したい僕が滅んでしまった後も
痛いって感情以外捨てました髄液を持つ生き物として

天野うずめ　@uzume_no_hijiri

雨つく底

消火用散水栓と消火栓の違いを思う　驟雨を過ぎて
汚水槽清掃という必要な嫌悪終わればすぐ服を脱ぎ
易操作性一号消火栓の易の一音を舌に乗せてやり過ごす
とりどりのバケツを置いて受けている地下街に特に倦む感情を
地の底は雨のつく底この話の終わりばかりを考えている
冷却塔の底に汚泥をすくい取り取っては捨てて終わるひと夏

虫武一俊　@mushitake

のどぼとけ

清水の舞台ほどではないけれど新地のランチ横目に見つつ
夜の街に酌んで尽きせぬ水鬻ぎおかみの掌より零れおちたり
泥水舐める仔猫穢しゆふたちのあかる参道傘を窄めて
くさめして飛沫はひとを死なしめん大河とならばひとうるほさん
水を呉れと泣いて果てにし兵士のこと気塞ぐ夜に臥してゐ寝るも
こんなにも喉が渇いてゐるからは水要らずといふわけにもいかぬ

最寄ゑ≠　@XavierCohen

中之島

ワイパーがきかないくらい打ちつける雨とライオン橋を渡った
冷凍庫に一袋だけ残ってた青い氷菓を折って分けあう
いままでの豪雨がまるでウソみたいカーテンの下は波うつひかり
土佐堀の遊歩道（プロムナード）の水溜まり手を離さずにふたりはよける
コンビニの袋の中は虹色に「ほろよい」たちで満たされている
きみのこと見ているだけでよかったのに夏の短さ知っていたのに

雨虎俊寛　@amefurashi3107

しゅわしゅわ

サイダーのＣＭみたい夏服のきみが飛び跳ね僕を追い越す
「好きです」と主語なく叫んだ告白あわれ玉砕フルーツパンチ
午後の庭アールグレイのティーソーダかよわくもないわたしのために
ビール飲むきみに合わせて大人ぶるジンジャーエールは辛くて苦手
雨の朝別れの予感躱そうとレモンスカッシュわざと選んだ
あさみどりメロンソーダはうたかたの炭酸弾け命はかなく

新棚のい　@hccmono

雨花

陸橋をのぼりつめたるわたくしの膝まで夜の雨は匂ひぬ
ふかくふかくきみに見せない奥処までゆきわたらせる桂花烏龍
まよなかの雨に濡れゐるあぢさゐを名前で呼べばなまなまとして
濡れてゐる　記憶の襞にしまはれたいつかの夏の私雨(わたくしあめ)に
やはらかな拒絶　わたしとこひびとと呼べないひとのあひだに雨は
あめをとこひつそりと来てにはたづみひとつつくつて帰つてゆきぬ

有村桔梗　@chattenoire_k

フェノールフタレインの潮騒

あなたほどの人がと問われ続けてもわたくしはまだ紫陽花のなか
手折るとは仕種にあらず水仙の儚きを言うことばと思う
花水木の歌のいずれにせよ我に告げられざりし愛ひとつあり
朝焼けの渚にやがて朽ちてゆく人魚が愛していたジミーチュウ
星月夜のひかりにほどく黒髪にフェノールフタレインの潮騒
アミラーゼが夜の濃度を狂わせてゆけりあなたの舌に触れれば

五十子尚夏

ぼくらの背徳

水溜りの底にゆうるく反射して君の輪っかが鈍くなる初夏
色水になった氷菓をたれながす雨がぼくらの背徳を割る
図書館でまいにち飲んだ水の味みたいに惚れてしまった天使に
ぬるすぎる初夏の象徴としてぼくらの市民プールは潰れるらしい
製氷皿から転がして五月雨を忘れた君へ差しだす化石
はじめての歌集につぎつぎ青色の付箋を貼れば呼べている海

真水翅　@xxmmz00

ボーナストラック

雨が降る日には別れを言い出せず　傘を持たずに来る人だから
後悔にたやすく染まる紫陽花のたしか去年は青だった道
金色の雨がほつれを縫うように私とあなたを交互に濡らす
この場所で好きと云われた変わりゆく街の変わらぬ店の珈琲
思い出という名のマベパールを外す　球形だって信じていたね
雨上がりのボーナストラック最後かもしれない虹をあなたと待った

深影コトハ　@cotoha_mikage

五月雨と水虫

水虫で皮膚が崩壊鳩の巣を思ひだしても心は晴れず
紫陽花は大輪となり五月雨を恵まれ続けて色を増し行く
水虫の皮膚崩壊が悲しくてお経の暗記に勤しむつもり
四階で他人の詩集を読んで居る五月雨の音をシャットダウンし
句集読み詩集を読めば山田町比良の住所に雨がしみ込む
梅雨曇りシャワーの様な夕立が父の農業服を濡らせり

石川順一　@Hitler57

ふる里

青年は何を見ているほおづえをつきて眺める湖のかなたに
霞立つ静かな池の残り鴨波紋ひろげて小さく鳴きたり
空うすくむらさきがかる夕まぐれ波影ほそく残り鴨うく
田植えすむ水面に映える夕焼けの里の姿を絵に残したり
田植えすむ水田にうつる伊吹嶺の影をゆらして残り鴨うく
鯉あまた泳ぎてにごる古寺の池にま白きすいれんの花

磯山武士　@takechan185

翠雨の庭

六月の呼吸はきっと鰓呼吸　空の遠くをぬんと泳いで
ひかりひかり陽の照る庭に雨の降る恍惚の中あなたは生まれる
ソーシャルディスタンシング　嘘つき　肩パンをくらってくしゃって笑うさみだれ
雨の日のしけた煙草が不味いこと　あなた笑うと八重歯が出るね
叫ぶようにまっすぐ落ちて一生分光る雨粒たちの数秒
みどりいろ　固定資産に入らない　翠雨、あなたの庭で跳ねたい

満島せしん　@seshinmitsushma

水無月六景

つまらないことなんてない遠く見る海もたなびく古着のシャツも
透明な風に吹かれて揺れているハンモックから見る水平線
傘の中少し不安な顔をして我に抱かれる六月の猫
艶やかに美しく咲け雨の中オマエは震え叫ぶ紫陽花
蜂蜜のように明るく微笑んであなたが甘く嫁ぐ水無月
伸ばしたら爪先までもひんやりと翠色した水無月になる

衣未　@mimi_4567

結晶になるまで

脚色をほどこされている思い出がごくごく水を飲んでも飲んでも
貸したまま返ってこないパーカーの好きなところと駄目なところ
カーテンが風に押されて少しだけ中身の残るペットボトルが
湖の上に浮かんだひとひらの木の葉のように過ごせたらいい
雨の檻閉じ込められて昏くなる部屋はもうすぐ結晶となる
囀りが上手くなりたい意味のない言葉をずっと発していたい

ふうみうり　@Am34Tt

ウォーターサイド・ウォッチング

真っ黒な渦を見つめる妹に行こうと声かけ返事は二重
舌の裏に溶けた海を触ろうとして行方がわからなくなっています
「おねえちゃん、なくしものくらべしてあそぼ」今日は泳ぎに来たはずなのに
濡れた足音に震える妹を見ると人形みたいに笑いだした
留守電にちゃぷりちゃぷちゃぷちゃぷちゃぷり　よかったね　ちゃぷちゃぷちゃぷちゃぷちゃぷり
翌日に打ち上げられた母親はぬらぬら烏賊の目と足まみれ

ブルーウェットふみ乃　@BLVEWHET

傘の骨

優しくはないな。どこにも行かないでほしいあなたに傘を差しだす
なんにでも縋りたくなる日はあつて『星の辞典』をめくるのもそれ
ほんたうと思へないのだ紫陽花のくにへあなたが旅立つことを
傘の骨はうつくしく伸び両腕をひろげたわたしなど及ばない
ふつくみてものなど書けば「それなんの意味があるの」と梔子は言ふ
秒針の音は降りやむこともなくわたしはここにずつと暮らすの

伊豆みつ　@izmit_tanka

わたしはスピカ

海の底沈んでもきっとあおく光るわたしはスピカただの目印
お湯の中からだを丸く沈めると街が見えるよエーゲ海の
眠りたる頬にしずくがこぼれ落つ月の光ははるかな速さで
えひもせずふいに涙がこぼれたりみんなみんなきっと月のせい
金星と地球がおどる軽やかに朝露こぼれる薔薇の一息
葉脈をなぞりて落つる玉しずく待ち構えるは土星の輪っか

犬塚晶加里　@a_riri0506

梅雨が好き

「君のこと」雨の音にかき消され聞こえなかった「好きなんだ」
ポタポタと涙をきれいに落としたら波紋ができるの？こころにも
傘のうち鈍い雨音耳にして叶わぬ予感君への想い
「梅雨が好き」めずらしいねと言ったなら不思議な顔して君がみていた
海に来て知らない間に消えていた砂に書いた「あいしてる」
転んだの砂に足をとらわれて流した涙も海の一滴

真岡まな　@mao_or_mana

みずあか

雪だった頃の記憶は蒼白い　水だった頃に比べてすこし
原付のヘッドライトを照らしたら紫陽花はまだ夜を知らない
許すとは愛とは違うものですかシンクに残る水垢を拭く
新品のビニール傘に新品の水滴がまた跳ねては消える
あらかじめ用意していた答えだしこれは自分で育てたトマト
いずれ夜。これから雨が降るらしい水は軟水それはゆずれん

街田青々　@bluesuqreme

透明なコップじゃないわ

透明なコップじゃないわそそがれたあなたの水は透明だけど
ぽちゃんとかちゃぽんとかいうだけなのよ蛙の飛び込む水音なんて
オフェーリアが流れていくわせせらぎが聞こえる真夜中のマンホール
ワイパーを止めてあなたをにじませてやまない雨に流れてしまえ
一杯のコップの水の上澄みの波紋に怯えるのはもう終わり
人間はほとんど水でできている天地をいったりきたりする水

宇祖田都子　@Shinnsyutu2020

ささやかな／生活　2

頬つたうみずは地面に吸い込まれ怒りの瑠璃玻璃結晶となる
降る雨を歩こう傘を喰い散らす合成獣類群に続いて
ピアノ弾きのPrestissimo、Allegroの楽譜のマーカー液　あお裏写り
断絶の兆し見ゆ　かの環状路再構築の驟雨稟議書
なおも夜。月はしずかにしのびより水煙草売る少女を照らし
磔刑の前夜、滴る葡萄たち声ひくく語る犯罪理論

内山佑樹　@rewolfnoomwons

六月の夜

アマプラで映画を観てた犯人は恋人で雨ばかり降ってた
溶けそうな六月の夜引き出しの奥の奥たまごっちを見つける
伝えたいくだらないことばかりありコップの底に残った氷
僕にだけわかる言葉で僕が言う　次に会えたら海に行きたい
テーブルをポケットティッシュで拭きながら離れてるんだなって思った
どうすればぜんぶのことが届くのか明日は梅雨の晴れ間らしいよ

泳二　@Ejshimada

ひとり

しんしんと海に沈めばしんしんと星空に浮く　広すぎる部屋
朗らかに笑うあなたを陽だまりにそっと置いたらこぼれる涙
そらいろのほとんどを占めるしろいろのあなたに落ちるあおになりたい
海もまた空なのでしょう海亀の羽ばたくように動くまえあし
息ひとつ生まれるあぶくの美しさ　海の光の空の水面の
水掻きが今朝また少し増えていて昨日より上手く人波をゆく

枝豆みどり　@edamame_midori

きっと

コンタクトレンズを嵌めて偽物の涙と偽物の朝が来る
おひるねの夢から醒めてじんわりとあふれる涙は代償である
泣いた分だけ世界から水が減り明日はきっと晴れるはずだよ
降る雨の軌跡Rと精神体Iが交わるときの時刻 t
明日は雨、もしくは曇り、または晴れ。わからないのが幸せだった
思春期の高校生も長雨も必ずやんで固まる地面

春名柊夜　@masatokun32kt

元始、海月は太陽だった

虹色に透ける肢体を揺らめかせ太陽になる真昼の海底
匂い立つ静寂の中聞く呼吸音は確かに焦がれるリズム
足掻いても無駄だと知った絡みつく想いはたとえば錨のように
貝殻はつついてみても閉じられたままで誰にも知られぬ幸運
塩味は時に苦くて目を瞑るこれはわたしの涙じゃないの
黄昏が薫る晩夏の砂浜で我が身枯れても世界を照らせ

福山桃歌　@peachsong_521

ビニール傘を開く人たち

六月はしかも水無月枯れてゆく早明浦ダムのようなこころを
何ならば消毒液の雨が降るそんな夜更があっても良いか
永田さんみたいな眉の老人が雨の自転車を漕いでいる
雨冷えのアマビエの貼られた窓の奥のカレンダーいまだ三月
著しくデフォルメされた街並みを雨が溶かしてゆくまで見てた
駅ナカのピアノ鎮魂歌となりてビニール傘を開く人たち

大橋春人　@hachidx2

眩しい背中

六月の雨は重くて沼のよう猫もわたしも尻尾がながい
耳の水が飛んでも跳ねても抜けなくてあなたの声をぼわぼわと聞く
泣きながら卵を落とすウミガメの黒いまなこに浮かぶ満月
噴水の向こうに座っている人の眩しい背中に嫉妬している
肩と肩触れあうごとく踊ってる卵をくるり箸でまわして
魂は小さな毬藻　水底でいつかあなたと暮らしてみたい

大森千里　@C1960928

タイム・アフター・タイム

きみはカフェ・ラッテと発音することを知った日だった。街に遠雷。
湿度１００パーセントって水中と変わらないねと笑ってる客
「海を感じる時」を読んでいる／向かいのきみがマフィンを崩す
待つことは得意だからね水差しの硬水が蒸発しきるまで
雨脚を言い訳にしてB面はあと一曲を残すばかりだ
夕立と呼ぶにはすこし早すぎる季節にチェット、歌をうたって

藤村内向　@fujimura_naiko

海まで五分

どくだみを胸にかかえて持っていく水無月までに会えたらいいね
目を閉じて息をひそめて待ってみるレモンサワーの雨がふるまで
ＳＯＳ街中砂漠遭難中イオンサプライ誰か
こんなにも遠かったのか五月末キウイソーダの海までの距離
どうしたのなんて訊けないよ五月メロウイエローの海がないてる
ワンコインのミルクコーヒー一時間ですこしやさしくなれるなら

藤森岬　@xk5RX1A8F46kakn

聖地

トイレ用プレイリストのほとんどが大森靖子ちゃんの曲だよ
暗闇でひざみろさんのツイートを思い出してる センサーのアホ
神様の存在証明。ねえ見てて、これから便器にスマホ落とすよ
音姫で消えちゃうくらいの声量で「好き」って言えば、これも排泄
使用済みナプキンあげます羽なんてあってもどうせ飛ばない身体
アタシにも防水機能はついてるし泣いているけど、たぶん平気

西淳子　@Jacky244Ray

くうげ

たゆたえばだれよりつよくあたたかいくうげだ（クラゲ視点の朝日）
ルールだと教わったから手招きをされたらまずは抱きつきに行く
透明なままのくうげと日光を蓄えすぎたくうげが並ぶ
ぼくかきみか分からなくなる触れ合えば指の先から似た熱を持つ
夢の中まで付き添えはしないけど抱きしめ続けることなら出来る
真夜中の海月二匹が完璧なワルツを踊る水槽の端

西村春希　@haruki_4911

今年の六月

体温を毎朝測るようになり必然的に平熱を知る
駅までの道に紫陽花あぢさゐと書きたくなるほど色濃く咲いた
自販機に百十円を流し込み形取られた飲み水を買う
いろはすのペットボトルは頼りなく駅のホームにわたしが滲む
たっぷりの水で飲み干す頭痛薬　雨の季節はもうすぐそこに
まだ水に湿ったままのくちびるは白いマスクに押し込んでおく

岡田奈紀佐　@spice16g

駿ちゃん

レモネードに生姜を入れるばあちゃんのふやけた指のしろさを思う
送り火を焚いてしずかな縁側にあえてかなしむために座った
半年ぶりに会ういとこからゆずられるカードのしまいこまれた匂い
都会の子、村の子と呼びわけられて村のプールの塩素のきつさ
駿ちゃんになって過ごした二週間　川べり　とおい山の稜線
水をまく　アスファルトには一瞬のみずうみ　ぼくはまた走りだす

貝澤駿一　@y_xy11

ハギビス（2019.10.11）

はじめての地への配属十日めの吾に轟轟と来たり、台風
洗車機に突っ込むごとき雨風の朝(あした)それでも出勤はせり
うすっぺらい名札ぶらさげおろおろとするうち職場が避難所となる
食糧も水も配れず桧皮色の毬立ちし毛布を渡すのみ
雨音のとどろく部屋の数十人みな感情を折りたたみ座す
川べりの地を護りきし堤防は堪えておりぬ、いまは、されど

沼尻つた子　@numatsuta

バスルームで髪を切る

浴室に不似合いなもの代表のスポーツロゴ入りレジャーシート
鼻歌はちょっきんちょっきんちょっきんなぼくがうさぎで君がかにだな
三センチくらい短くしていいよ二ヶ月分のぼくよ、さよなら
前髪を切られるために目をつぶる銀色って鋭い色だ
シャワーから水滴落ちて二人してひえって言ったマンガみたいに
排水口に突進していくぼくだったものといっしょに踊りませんか

薄荷。　@aieohimeco

お茶を飲みながら読書会

雨の日は「植物図鑑」重すぎるブログの電子手帖にまとめ
お茶お菓子本の装丁花畑写真に踊るみんなの想い
河原にて日向ぼっこで本を読む amazon レビューは一万冊に
茶器ブックカバーの自慢や楽しさが伝わって来る写真の飾り
読書会紅茶を淹れて書きかけの歌集(ほん)の感想「登録」を押す
ネットにて「お茶を飲みながら読書会」ペットボトルのお茶大歓迎

@kaizen_nagoya　@kaizen_nagoya

会えない朝に五月雨が降る

君思う　そちら元気にしてますか　雨が止んでも会えない四月
君思う　こちらは今日も晴れてます　雨のち晴れの会いたい五月
寂しいと思う気持ちは霧雨の如く胸刺す四月七日
特別な日は日常に溶け込んで食卓に載る梅雨入りの報
思い出を画像の中で手繰りつつ去年の紫陽花眺めておりぬ
歩けない君に青空を見せたいとあめふりくまのこ歌う昼時

かざえ　@kazae_es

行く水

水源地より遠く離れしわが街に「プール開き」の知らせ来たりぬ
面接のまえに一杯水を飲む心はすでに乾き果てたり
種まきに疲れし少女さそい出し水平線までヨット馳せらす
眠りいる裸の青年こんこんとその裡に湧く水と精液
夏をゆく川の光になりたくてひとりぼっちの君に手を振る
水を抱き水に抱かれて人は生く一輪挿しの薔薇の淋しさ

梶原一人 @MrDekopin

朽ち草の川

「蛍狩り、なんて物騒」おととしも去年も言って笑ってたっけ
内緒ばなしの終わりみたいな顔をして指を差しては光ったと言う
僕だけのそばにはいられない君だ　瞳の中で蛍は濡れる
こっそりと触れるだけでも温かい手なのだろうし触れないけれど
好きだったと呟いてみるわたしもと呟かれてみる涼しい川の
じゃあねっていったらきっとさよならでまたねのなかじゃないからきつい

梶原翔星 @shoto_kajiwara

無題

白い月　かつてあったという水がかすかに透けている白い月
集めても何になるのか分からないままで集める涼しいシール
扇風機前でふぁんふぁん喋るからふぁんふぁん国の国王でしょう
ばらばらになってしまったさんずいの一等青い海のさんずい
繰り返し見る淡い夢トンネルを抜けないままで目覚めてしまう
あと少しやさしい人になりたくてひらがなで書くめがまうすぐめ

ナタカ @utanataka

森を包む

よく来たね森の目覚めを少しだけ遅らせている霧がささやく
ミルクにはなれない霧は野いちごの赤をぽわっと浮かばせている
艶めきを増しつつ蛇は霧を縫う楽譜にスラーを書き込むように
もしかして森を包んでいる霧はきのうは山の雪だったもの
暴力とは無縁のような顔をして霧は雫へ姿を変える
霧に似た花の香りを霧の香と呼べばほのかに帰路は明るい

楢原もか @kiharaneko

大海原

うつくしくト音記号を描くひとに水の深さを教へてしまふ
タオルから夏のにほひのただよひて梅雨の晴れ間にビールを飲まむ
すこしだけ死にたく思ひ塩蔵のわかめの塩を水に流せり
金色の雨を浴むれば思ほゆるアードベッグのうしほの香り
権力に弱きをとこゆ降る指示に驟雨に揺らぐ池を思へり
この道を歩いてゆけば着くだらう意味ひとつなき大海原に

門脇篤史 @508atsu

60%は水

洗濯機ゆらす渦巻きぐるぐると今日の晩飯さえ決めれない
上水道　俺のからだ　下水道　野菜炒めがほどよく出来る
ラーメン屋で出されたコップ一杯も出会いとすれば出会いあふれる
政治家も60%は水らしく偉そうな水の演説を聞く
お風呂場は今でもきみが住んでいてシャワーが胸をノックしてくる
蛇口から解き放たれてあかねさす水流まっすぐにおちていく

がね @amicus08

循環

故郷の一番大きい湖は川になり海になりまた雨
朝露が光る曇りの日の窓の紫陽花今日は色が違うな
クーラーが効いた部室は空っぽで凍ったお茶はまだ早かった
巻き髪と服の色しか違わないスープパスタを啜る女子たち
昼前の恥と嫌悪を石鹸の泡の匂いで溶かしゆく風呂
寝る前の一杯が明日を決めるカプセルを押し流す渓流

成美 @2901palm

みずとまつり

サイダーのシュワシュワみたいな水玉の浴衣おろした初デート、夏
カラコロと下駄の足音軽快に君の待ってる川沿い小走り
川沿いの先に浴衣の君がいて照れくさそうにおう、と手を上げる
浴衣どう？と尋ねてみたら目を逸らし君は呟くカルピスみたいと
やるよってぶっきらぼうに渡されたラムネは少しぬるい甘さだ
下鴨の御手洗池に足浸し君と繋いだ手のあたたかさ

にう @niuniuworld

夏未満

お互いの住む町に今日降るらしい雨を詳しく見ていきましょう
六月を責めることなくいつ来ても濡れている芝生のせいにした
見た目より水がそこまで入らない電気ケトルが役に立った日
かき氷の画像を送り合っている　おいしそう、つよそう、かっこいい
なんというかジンジャーエールを好きになる気がする暑さ　去年と違う
フリスビーを投げているより追いかけているが日曜日を占めていく

橙田千尋　@komekokakari

モーニングコーヒー

風の音　ガラスをつたう　涙雨　傘を手渡す　眠そうなきみ
名づけ親　洗礼者と　同じだと　犬　泡だらけ「ジョン」と亡き人
リード紐　手に手をとって　散歩道　アイスを食べる　きみに降る雨
サメみたい　ぼくの犬歯を　笑うきみ　たぶん役立つ　海の中なら
犬とぼく　曇天の海　雨宿り　キッチンカーに　コーヒーの湯気
夏の宵　アイスコーヒー　浮き氷　ひび割れる音　耳を叩いて

ドーナツ　@donut_no_ana

湖岸

湖岸線走っているとビーチにはチェーンがされて駐車禁止に
感染の防止のため他県からの車入れず春の琵琶湖は
図書館の裏山にある墓場から墓石と共に湖(うみ)を眺める
人間がいてもいなくても漣(さざなみ)は立ってアオサギ脚を浸して
もがいてももがいてもなお外海に出られぬ真昼陸上の船
夏の風駐車場まだ封鎖され夜勤が明けて湖岸を走る

涸れ井戸　@kareido1111

子ども時代の欠片

道路から堰に足入れ上流へ帰る子らの麦わら帽子
プールから滴り落ちた水滴が去った子どもの足跡作る
雨上がり買ったばかりの長靴の性能試し歩み続けた
初めての一人で旅行車中から屋根の雨音僕の御守り
教室に居場所失い誰も来ぬ湖の隅トーテムポール
賑わいの海のそばには人知れぬサンダル一つ相棒探す

京野パンダ　@kehunopanda

安物、火と木、不要不急

青白いアイスを買いに出たっきりひとりで怒りひとりで暮らす
不要不急のじかんのかぎりを安物の梅酒など飲むお湯割りにして
怒りともよろこびとも読み変えてきてパンデミックのストロベリームーン
いつのまにウサギの紐のマスクする日々をいとしくおもいはじめた？
みずつきという名の国があると聞く耳あおあおと燃えゆく夜に
ああ気持ちいい　火と木を買いに出るだけの夕方のみずいろの時間

とみいえひろこ　@hirokodori

鉄の卵

鉄塊のアマビエが手のひらに乗りわずかに沈み鎮まる光
アマビエは一寸と五分　湯で煮れば滋味の湧き来るくろがねの身ぞ
平均律クラヴィーアまた雨が止み立ち尽くすにはお似合いの階(きざ)
沼の辺の水木に留まる五位鷺のヴィオラってつまりそんな音色だ
額いくつ引き千切られてあじさいのだが球でありつづける紫紺
首すじの軽い引き攣れなだめつつ振り向けば月、蛞蝓の道

中村成志　@nakam8

赤錆

姉がいた和室は潮のにおいしておそらく人魚だったと思う
水牛の揺らすリズムでたましいがゆるゆる溶けて離島の海よ
リラクゼーション音楽を選ぶゆび海から生まれたの知っている
潮時を逃した彼と今日も行くファミレスにある鉄臭い水
上京しあなたは二子玉川をニコタマと呼ぶ真白な肌で
生きているだけでせかいにゆるされる土砂降り雨の土曜の午後は

幻想青瀬　@genso_aose

水禽を追う

よこしまなこころが透けて見えそうでひかえめに手と喉を洗った
あたたかな土地から来れば疑いもなく受けとめて徽雨のさびしさ
あっさりとなめらかになるチョコレートうすまりやすい夏のココアは
父のない子となり横にはりついた目で前を見る水禽を追う
愛されている存在のはずなのに目薬のつぶうまくさせない
革靴に防水スプレーふりかける尖ったものは溺れやすくて

漕戸もり　@muramy3939

ぬるま湯

あなたは遠くを指すことばで　さようなら、あなたに降っている夏の雨
瑠璃鶲だった夢からもどりつつのこりの水をお花にあげる
泡だらけで生活すればたのしいんでしょう　よごれたうさぎを洗う
ぬるま湯はひかりもにぶい水無月のバスタブに浮くわたしのからだ
喧騒が染みつく耳をやわらかく煮込めば野菜スープの甘み
引っ越してから踏切をみていない　みたいな、サイダーとか飲みながら

小泉夜雨　@kozumi_yau

ぽん酢2（つー）

引用にまみれる日々よぽん酢よりぽん酢の味のするもののなく
ぽん酢、の、日めくりカレンダー考えて五月半ばにネタの尽きけり
居酒屋の瓶のそういう並べかたをぽん酢でもできると知りしのち
口癖を「ぽんず」にできる「あつ森」に小さき魚影の翻りたる
小学生向けの「たぬき」の暗号と、そう、ぽん酢でいただくお肉
Ponzu is delicious. という片言を和訳したものなり言ったのは

御殿山みなみ　@1ookat2

水にまつわる覚え書き

外国の味だと思い飲んでいたウヰルキンソンは兵庫の生まれ
コカ・コーラの瓶みたいに、水底でひとり静かに透き通りたい
この水はいつかの海か　蛇口から流れる水をグラスにためる
もういいか　雨が降る朝、今出川通を東に歩いている
紫陽花は雨水の染み　夕と夜を溶かし世界を滲ませていく
なにもかも静かに死んでいるようだ。冷めた湯船に溺れる夜は

紺村

街を洗う

遠くなる傘を眺める人混みを分けて追うほど好きじゃなかった
いっぱいの水を貼り付けバスはゆくけやき並木に雨のそぼ降る
靴下の内にふやける足指のやわさを想う夕立の道
どこまでで止めればいいかいつの間に知った泣かずに剥ける玉葱
「いろはす」の弱さが嫌いこれ以上ないほど踏めばすこしくすんだ
側溝のガラス破片はそれぞれに違う向きしてはね返す空

西藤智　@hitonosulab

雨の信号

どこからか雨の匂いはふいにきて呼び覚ますいつかの帰り道
水彩画みたいな午後だ　前をゆくあなたのシャツが淡く滲んで
信号はもう変わりそう舗装道路（アスファルト）しぶきを立てて飛び越えてゆく
地下鉄の階段口でじゃあまた、と傘をたたんだ　帰ってしまうよ
感情のしっぽを捕まえるまでの長すぎる雨　いますぐにあいたい
透明な心がほしいあのひとを想えば音もなく濁る胸

千原こはぎ　@kohagi_tw

スローワルツを

雨雲に覆われていく夕空に残されし赤い時を見ている
頑なな意思がゆっくり解かれて笹の葉　慈雨に開かれていく
溶けていく氷が水面を生み出してグラスの中に沈む約束
一斉に咲いたふりして濡れている紫陽花の過去を僕は知ってる
今、雨に濡れたら僕ら溶け出して憎しみ合ってしまうのでしょう
「さよなら」と叫んだ声を掻き消した優しい雨とスローワルツを

chari　@greenchari2

6月8日

突然の豪雨のわけはさよならに打ちのめされたあめふらしです
降りしきる自業自得を吸い込んで黒く染まってゆくアスファルト
ここはいつかお茶したカフェだあたたかなプロジェクションマッピング　消えない
嘴をコックピットに変えながらヒヨドリが飛ぶ梅雨寒の空
「ひまわり」が回り続ける日々を経て6月8日がまたやってくる
修正の多い天気図眼裏のこれはあなたが好きだった花

月丘ナイル　@nyle_222

宝石

明朝の外の寒さに室内は霧立ちのめりプールも消える
子供らは百花繚乱戯れる水底の宝石を目指して
ゴーグルの奥に見えてる表情がガラスの中の水中花めく
飛び込んで羊水めいた居心地に母と聴いてた曲思い出す
おばさんがプールの中から「ちょっとそこ！あなたよあなた。どこみてんのよ」
帰り道塩素をまとう我々は蝉の合唱団に溶け込む

つぶら満月　@tuburamangetu

神田川（コロナ版）

逢いたくて逢いたくてひじまで濡れる夜も神田川にはコロナの噂
赤い手拭なんて持たないだってもう、お茶の水には風呂屋はないし
バスルーム開ければあなた一人だけ胎内標本となる水の中
コロナとかステイホームとうるさくて今日も逢えない駅のホームで
神田川流れていれば早緑に染まってわたしひとりで暮らす
虹なんて月並みだけど大空にかかれば明日は逢えそうになる

多香子

夜巻く渦

浴槽に捧ぐ溜め息飲み込めぬ嘘止め処なく滴る憂い
汚濁した肚の底から湧く自由喉の深くへ沈む協奏
何もかも洗い流してしまいたい夜巻く渦は激しくていい
消毒の液に消される毒を思う汝の罪を赦す海原
穿たれた溝を自在に泳ぐときそこは銀河だ薄紫だ
渾沌の記臆を漱ぐ濃く淡く泡沫（ほうまつ）は満つ優しい最期

瀧口美和 @abcdefghijklmiw

雨と僕と君と雨

雨の日の想い出ひとつくれないか　雨で世界の　色が流れる
あまぐもに絵の具まぜたらどうなるかしら　雨は色づき　街はカラフル
サンダルではしゃぐ雨降り濡れる君「はだしになれば」と甘いささやき
声合わせ「せーの」で君と駆けていく　降り行く雨も　振り切る速度で
雨宿り　こぼれる雨とこぼれる言葉　君が好きだと　ちゃんと聞こえた？
雨の日の想い出ひとつ作るたび　雨が色づき　好きになってく

さかがめ @sakagame00

傘を卸した日

雨粒が葉っぱを叩く音がして切り上げた夢を思い出せない
朝シャンは髪に悪いと聞いたけど多分嘘だよ 気分がいいし
オシャレでもコーヒーミルは手間だからインスタントを淹れる、味わう
世界では何処かでまた血の雨が降る 私は今日、傘を卸しました
今はもう飛び越えられる水たまり アメンボとは合わなくなった目線
寝る前にコップ1杯の水を飲む 乾いた心が湿る程度の

三梢モニオ @monio_sankozue

やがて、濁流

憎しみを使い果たしたこの胸にけれど小川は流れ続ける
混色の果ては明けない夜のいろ今さら抱きしめられたくない
水底に朽ち果ててゆく樹のようなそこに悲しみ棲みつくような
石鹸をタオルにこすりつけるとき尖りはじめる明日の予定
雨後の風、そして日差しの激しさよわたしにもその怒りが欲しい
わたしの中にいるたくさんのわたしたち殴り合うから崖に来ました

田村穂隆 @Da_Ho_Ra

追認

実際はしていなかった後悔を口にしたとき降り出した雨
テーブルをふけばわずかに水滴の残って始発までここにいる
永遠に愛することの苦しみよ喉に刺さった人魚のこぼね
燃え尽きた花火はひとり砂浜に夜を支える背骨のように
するすると飛ぶ鳥の群れ　追認をするかのごとく空は明るむ
花は桜、君は誰　終止符の対義語として置いてゆく傘

たろりずむ @tarrorism

雨を待つ

みずうみの淡くちいさく波立てば白鷺の脚ぬらすあかとき
紫陽花を咲かせて水の無い月がはじまる会うのはだれでもいいな
パックごと牛乳を飲む人といてそういう野生ならほしかった
蚊を水がはぐくむという真実を受けいれがたく水辺にくらす
飼いねこに二時間おきに目薬をさすこともまた幸福として
スルフォラファン雨を待つ葉のそのようにあなたのそばがいいスルフォラファン

嶋田さくらこ @sakrako0304

葉脈にそって零れる

ビニール傘にぽつりぽつりと弾けゆく雨音きっとこれはとおり雨
葉脈にそって零れる銀色のひかりの粒に濡れてきぬぎぬ
紫陽花の花びらにふれわたくしの雨はこんなにやわらかくない
海へつづく煉瓦造りの街区この水面いつから海を忘れる
汽水域を漂うような残像にふれようとして弾けてしまう
忘れるな、と叫んでくれた小雨降る運河をこえてゆりかもめ鳴く

西鎮 @xi_zhen_ivUT

晴れのち雨のち凪

「春の雨の味だね」「かもね」そうやって今日から特別になるエビアン
砂浜の足跡つぎつぎ盗まれて永遠なんて信じてはだめ
もう降りることのない駅の自販機のラインナップを日記に残す
スエードのブーツに雨は染み込んで泣きたいときに泣けばよかった
カビ取りに躍起になれば感情の透明になる瞬間がある
2プッシュ分のリンスを手に受けて今日も誰かを押しのけ生きた

芍薬 @yuritanyogini

水辺の生きもの

無理に流さなくてもいい豆皿のかへるにふはり洗剤の泡
岸辺のない海に扮した少年は楽屋で魚を浮かべてゐます
かへるをかべに叩きつけてはいけないと読みきかせてゐる祖父の口髭
子供フィルターを使ふときみは微笑んでおたまに見えませんかと云つた
標本になつたウォーレストビガエル今はしづかに目を閉ざしをり
密室事件は解けるだらうか洗ひ熊は倦むことなく手を洗いつづける

雀來豆 @jacksbeans2

粘度

糊の中浮いたあぶくとそっくりのため息だろうここが水なら
冷蔵庫のうなりの隙間　水葬はいいな　ときみと読経している
水よりも水らしくない切り傷で染められている流水を見る
吐き出した体液にない面影を探ってしまい水、と呟く
洗う手に菌が残るかわからずにくちづけるだろうここが水なら
ため息で封筒を閉じ糊の中浮いたあぶくの水葬をした

千仗千紘 @Chihiro_Senjyo

雨と距離

ああそれじゃ教えたげるし待っててよ口実とする駅までの距離
アーケードは終わりを迎え速やかに傘のぶんだけ開かれる距離
跳ぶために力の入る唇の「んっ」のかたちが水溜りの距離
ぴんと反る人差し指と花びらに水をたたえたツツジとの距離
ひとりなら走って渡る点滅の信号から信号までの距離
駅北のロータリー傘のぶんそしてもう少しだけ狭くなる距離

ソウシ @sixia0uT8BMBIgp

ウユニ湖のように

雨上がりあなたの靴が幾つもの飛沫を起こし街はきらきら
梅雨に吹くフルート少しくぐもってああこの音は水底の音
少しだけ塩を含んだ水を飲む　島の小さな診療所へと
心臓はほとんど水で出来ている　だからあなたの声に震える
水と水　手と手　鏡と香水と　向き合うときに己の武器を
ウユニ湖のように鋭い美しさ、そして強さを守り抜きたい

鈴木智子 @cfun820_ts

かたわうの水

ほんのりと甘く感じる水だった祖父母の家の水道の水
梅雨の外出は雨との競争だ　帰宅と降り出し、どちらが早い？
やんだかを知りたくて見る窓の外　水たまりにまだ雨が刺してる
右下が「水」になってる「様」の字で誰から届いた便りか分かる
魚には棲めない水を湛えてる湖面のネオンブルーの冷たさ
波立った心を凪に戻すのはわたしに落ちる淡い月光

諏訪灯 @_skydew

梅雨になるまで待って

空梅雨の預言者となる薄藍の襟なしシャツの正攻法で
行き合いの子猫をなでる手には傷　ね、アコースティックギター弾いてよ
梅雨寒をロックでちょうだい間違いの多い私ときみに乾杯
傘と傘すれ違いざまよけるときひとの孤独と応答をする
雨と頬の出会いだなんて他人事（ひとごと）のようにきれいに記憶しないで
思春期が終わるアイコス点す夜ただそれだけの海　無音かな

たえなかすず @suzusuzu2009